

名古屋大学博物館第4回特別展記録 名帝大けふ誕生—初代総長渋澤元治とその時代

Records of 4th NUM Special Exhibition
“Motoji Shibusawa and his role in the birth of Nagoya Imperial University”

共 催：名古屋大学大学史資料室
会 場：名古屋大学博物館
会 期：2002（平成14）年4月8日（月）から8月31日（土）、月・火曜日休館
（ただし4月8・9日は開館）

ご あ い さ つ

このたび、第4回名古屋大学博物館特別展として、『名帝大けふ誕生—初代総長渋澤元治とその時代—』を、博物館と大学史資料室との共催で開催する運びとなりました。

名古屋大学が総合大学として整備される出発点となったのは、今から63年前の1939（昭和14）年の名古屋帝国大学創設です。地元の大きな期待と支援を受けて実現したものです。渋澤元治は、初代総長として1946（昭和21）年までの戦前・戦中・戦後の困難な時期に、草創期の名古屋大学の整備に尽力しました。

埼玉県深谷市の渋澤元治記念館で展示・保管されていた元治ゆかりの品が、昨年の秋、名古屋大学大学史資料室に一括して移管されたのを機に、元治の活動を通して、この時代の名古屋大学を振り返ることにしました。

日本で最後に創設された帝国大学として清新の気に満ちていたこの時代は、軍国主義下における数々の痛恨の体験を経て、廢墟から再出発した時代でもあります。当時の名古屋大学の状況をたどることにより、今、再び問われている「名古屋大学のあり方」を考えるきっかけにしたいと思います。

特別展の開催に当たり、以下の方々から多大なご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。市川茂雄、伊東和夫、加藤貞夫、木方十根、岸本淳子、榊 米一郎、島岡 眞、高橋雄造、柘植 新、服部 弘、牧 麗、丸勢 進、宮崎洋介、宮地 巖、宮内恭一、森田千明、山崎一雄、株式会社中央製作所、株式会社日立ハイテクノロジーズ、渋澤元治記念館、東京都公文書館、独立行政法人国立科学博物館、名古屋大学工学部・工学研究科電気系教室、名古屋大学100万ボルト電子顕微鏡研究室
（敬称略）

2002年4月8日

名古屋大学博物館長 足 立 守
名古屋大学大学史資料室長 加 藤 鉦 治

（報告者付記）特別展の開会以降、近藤守信氏、加藤武夫氏、および中日新聞社にお世話になりましたことを記し、謝意を表します。以下文中のカギ括弧は報告者による注記を示します。展示解説文中のルビは省略しました。ポスターを図1に示します。なお、本特別展の展示内容をまとめた名大史ブック

レット6『名古屋帝国大学創設のころ—初代総長洪澤元治とその時代（仮題）』がまもなく出版される予定です（詳しくは大学史資料室または博物館までお問い合わせください）。

冒頭解説

名古屋大学が総合大学として整備される出発点となったのは、1939（昭和14）年の名古屋帝国大学（名帝大）創設です。そこから終戦直後まで、初代総長洪澤元治の時代の本学の歴史をたどります。

「初代総長洪澤元治（1876～1975）」[肖像写真、解説]

洪澤元治は1939（昭和14）年、名古屋帝国大学初代総長に就任しました。創立当時の名帝大は、戦時下という困難な状況下で大学の整備を行わねばなりませんでした。洪澤は、新設された理工学部の教員の選任、新キャンパスや建物の建設・研究等に必要な資金の寄付依頼などに奔走しました。さらに、東山新キャンパスの整備計画をつくり、医学と理工学をあわせた総合研究を行う航空医学研究所（現 環境医学研究所）も設立しました。また、戦時下における下宿不足のため学生寮を設置し、そこで「総長懇談会」を始めるなど、学生との交流につとめました。病院防空や研究室疎開などによって、空襲から大学を守る努力もしました。さらに洪澤は、大学の中だけでなくこの地域の研究活動を奨励し、伊藤圭介・吉雄常三・水谷豊文など、地元における医学・科学研究者の功績の紹介や普及にも協力しました。戦後も大学復興の基礎づくりに尽力しましたが、1946年1月、高齢と病気を理由に総長を退任しました。



図1 ポスター

「総合大学への道」[解説]

名古屋帝国大学は、1939（昭和14）年4月1日に、最後の帝大として創設されました。そこに至るまでには、愛知県公立医学校（1878年）、県立医学専門学校（1903年）、県立愛知医科大学（1920年）、官立名古屋医科大学（1931年）などの前身校時代を経ています。名帝大創設の背景には、県・市議会あげての長年にわたる総合大学設置運動がありました。創設費900万円は県が負担し、敷地約17万3000坪は地元の土地区画整理組合が提供しました。創設初年度には、官立名古屋医科大学を改組した医学部のみが置かれていましたが、翌1940年度に理工学部（1942年度には工学部と理学部に分離）が開設されて総合大学としての形が整いました。ただし、文科系学部の開設は戦後に持ち越されました。

[付図「名古屋大学の沿革」は省略]

「名帝大創立のころ—新聞記事に見る名帝大設立で

The Establishment of Nagoya Imperial University」コーナー（図2）

(1) 「地元にて名帝大設立の機運広がる—急速実現・具体化へ— 1938（昭和13）年1月～5月」

[新聞記事複製]

「待望の名古屋総合大学実現の第一歩へ／期成同盟産声をあぐ」（1月28日『新愛知』）、「総合大学建設運動いよいよ議会の花道に登場」（3月6日『新愛知』）、「待望の名古屋帝大文部省で実現に決す」（5月7日『大阪朝日』）

(2) 「難産 1938 (昭和13) 年11月」 [新聞記事複製]

「遂に名帝大予算大蔵省議で削除」(11月18日『新愛知』)、「時局色を盛って工科単科にせよ／名帝大・大蔵省の腹」(11月20日『名古屋新聞』)、「開学が一年遅れても三学部制は固守、今夕まで復活要求」(11月20日『大阪朝日』)、「誠意遂に認められて名大“理工学部”遂に実現、将来の独立も有望視」(11月29日『大阪毎日』)

(3) 「待望の「名帝大」実現へ！ 1938 (昭和13) 年11月」 [新聞記事複製]

「凱旋の田中知事を迎え議事もそっちのけ／帝大誕生に沸く県会」(11月29日『大阪毎日』)、「十六年度までには更に理学部独立／生みの親帰る」(11月29日『大阪朝日』)、「田中さん“有難たう”皆さんの熱と力が名帝大創設の礎石だ／あくまで謙譲の立役者」(11月30日『大阪毎日』)、「鏡ヶ池の一带に奏でる“帝大マーチ”／都塵はるかに十八万余坪」(11月29日『名古屋新聞』)

(4) 「初代総長、渋澤元治に内定！ 1939 (昭和14) 年3月」 [新聞記事複製]

「名古屋帝大初代総長渋澤元治博士に内定」(3月2日『親愛知』)、「新総長に映える名帝大」(3月2日『大阪毎日』)、「名帝大候補地視察/"結構です"の連発／大いに天下の秀才を育てるよ」(3月17日『名古屋新聞』)、「部長などは白紙さ／名大創設を双肩に渋澤さん来名」(3月17日『新愛知』)

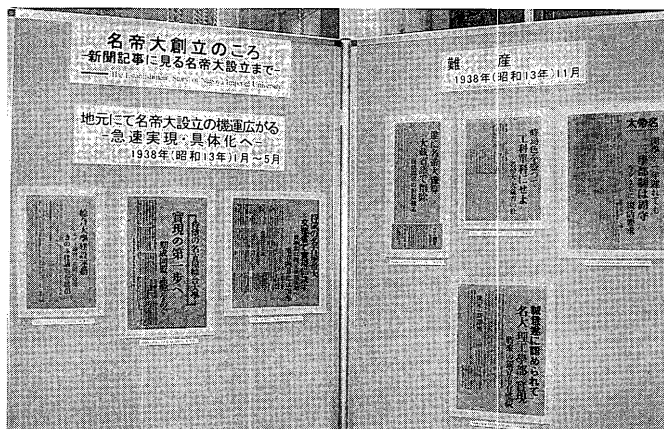


図2 「名帝大創設のころ」のコーナー

(5) 「名帝大けふ誕生 1939年 (昭和14) 年4月～5月」 [新聞記事複製、写真]

新聞記事：「東海文化の誇り名帝大けふ誕生」(4月2日『名古屋新聞』)、「交換嬢がにっこりと“こちらら名帝大”」(4月2日『大阪毎日』)、「まづ人格を築け／渋澤総長親心の初訓辞／名帝大けふ始学式」(4月15日『大阪朝日』)

写真：「開学式の様子 1943 (昭和18) 年5月1日」

(6) 「開学記念日のいわれ」 [解説]

名古屋大学の開学記念日は5月1日です。これは、医学部の前身校である「名古屋医科大学」の開学記念日に由来します。「名古屋医科大学」は1931 (昭和6) 年「県立愛知医科大学」から官立移管されますが、その設置法令 (官制中改正) が施行された5月1日を開学記念日としました。これを名古屋帝国大学も引き継ぎ、1940 (昭和15) 年の第1回創立記念式、1943 (昭和18) 年の開学式も5月1日に挙行されています。

(7) 「1942 (昭和17) 年度の文書から」 [実物をケース展示、解説]

「帝大時代、学内で書類送付に使用した木箱」(加藤武夫氏寄贈)

「文部省よりの指示文書」:中等教育の修学年限短縮を閣議決定後、各帝国大学に対して、高等学校に

おける授業内容について意見を求めたもの〔9月11日付け第434号〕。高等学校は前年にそれまでの3年が軍事的理由から2年半となっていました、さらにこの決定で2年に短縮されました。

「意見提出を催促する文部省からの暗号電報」

「10月9日に書かれた回答文書案」：年限短縮は「現下の情勢上やむをえず」との認識のもと、「外国語を蔑視することは最も戒めるべき」といった意見や提案が詳しく述べられています。

「10月末調べの年俸調書の一部」：理論物理学者坂田昌一博士（当時31才）〔理学部教授の末席、年俸2550円〕をはじめ、著名な学者の名前が並んでいます。なお、当時の1円は、標準的な米の値段で換算すると、現在の1000円程度と考えられます。

「国産初の商用電子顕微鏡

The first commercial electron microscope in Japan」コーナー（図3）

（1）HU-2型〔実物展示、解説、写真、図〕

解説：国産初の商用電子顕微鏡HU-2型は1942年（昭和17年）12月に名帝大に設置されました。当時、榊助教授（現、名大名誉教授）を中心に学内での共同研究が始まりました。その成果は1943年（昭和18年）9月の日本学術振興会の委員会で、榊委員により発表されました。図はそのときの電顕像の撮影例です。

写真と図：「電子顕微鏡HU-2型」、「HU-2型の鏡体の構造」、「電子顕微鏡模式図」、「HU-2型による撮影例（五酸化バナジウムコロイド、酸化亜鉛、カオリン（ツェツトリツ）、ワクチンウイルス；独立行政法人国立科学博物館所蔵）」

（2）「渋澤元治と電子顕微鏡HU-2型」〔解説〕

名帝大創設のおり、最新設備として電子顕微鏡が選ばれました。名古屋医大（現医学部）の電子顕微鏡への期待もあったようです。当時、日立製作所の電子顕微鏡の第2回試作機は2台製作され、そのうちの1台が1942年（昭和17年）12月に名帝大に設置されました。渋澤は前年の12月、同社の中央研究所で製作担当の笠井完博士よりこの電子顕微鏡の説明を受けております。渋澤によると「小平社長の厚意で本学予算の許す範囲の値段で極めて安価に得て東山工学部実験室に据えた。」とあります。その後、電子レンズを追加するなどの改良がなされ現在の姿になりました。当時の電子顕微鏡の外観と撮影写真は後方展示ボードにあります〔上記参照〕。

（3）油拡散ポンプ〔実物〕：昭和25年頃HU-2に使用されました。

（4）「手にとってご覧ください」コーナー

『電子顕微鏡』（鈴木重夫著、1942（昭和17）年、河出書房刊）：当時の電子顕微鏡の啓蒙書です。展示ボードの模式図もこの本にあります。

『アルデンネ超電子顕微鏡』（文部省専門学務局訳、1942（昭和17）年、丸善刊）：榊さんは翻訳者の一人です。

「日本学術振興会第十常置委員会第三十七小委員会一資料第27回会議（1943（昭和18）年9月27日）記事より」：榊さんの委員会での発表記録です。

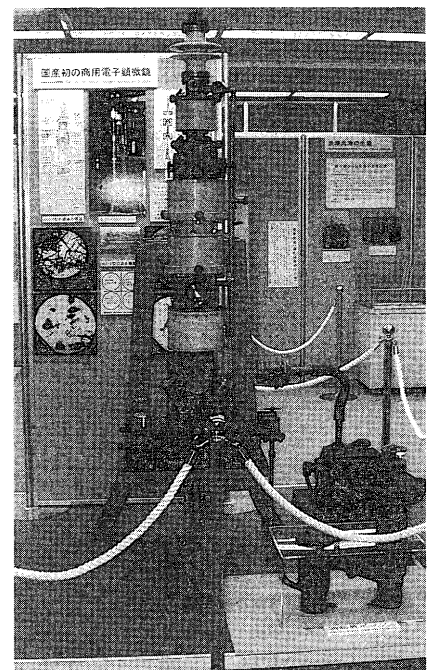


図3 「国産初の商用電子顕微鏡」のコーナー

「アルバム『Electron Microscopy Album Hitachi, Ltd. 1951』にみられる初期の電子顕微鏡（日立製）：今回移管された渋澤資料の一部です。

「東山キャンパスの歩み Higashiyama Campus — from past to present」コーナー（図4）

（1）「東山キャンパスの決定 1939（昭和14）年」[新聞記事複製、解説]

新聞記事：『「名帝大」敷地何処へ“三候補地” 渋澤博士の踏査行』、「名帝大の候補地は何れも好適地だ／けふも観察の渋澤博士語る」、「陣痛から一転、名帝大の敷地決まる／鏡ヶ池付近・十四万坪」

解説：東山キャンパスの敷地は、当初、「矢田川廃川敷地」、「東山動物園西南地区」そして「猫ヶ洞池南部一帯」が候補地として考えられていました。当時、渋澤も自ら現地を視察しています。そして、最終的に1939（昭和14）年5月に東山地区（47万2700平方メートル）が決定されました。

（2）「東山キャンパスへの学部移転と新規学部の設立 1942（昭和17）年」[図面、写真、解説]

写真：「当時の理学部棟（一部建設中）」、「昭和14年5月8日名帝大敷地の鏡ヶ池より東山公園を望む、池のほとりの建物は職員学生集会所恵風亭」、「当時の工学部棟」（写真提供：中日新聞社）

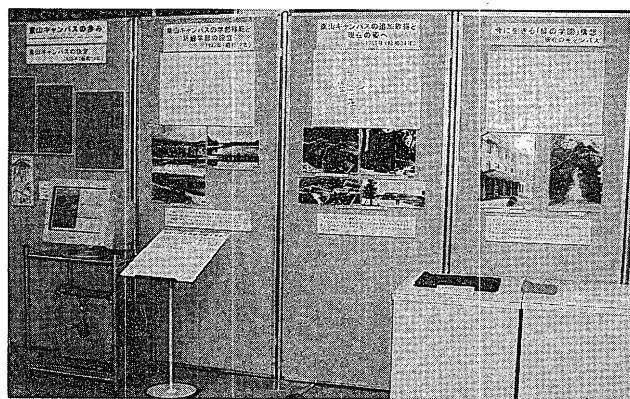


図4 「東山キャンパスの歩み」のコーナー

解説：東山キャンパスの敷地整備と施設の建設は、1941（昭和16）年ごろから開始され、翌1942（昭和17）年には、学部の移転も始まりました。移転第1号は工学部（1942年4月：写真）で、つぎに理学部が2ヶ月遅れで移転してきました。当時は、校舎のほとんどが木造の建物でした。

（3）「東山キャンパスの追加取得と現在の姿へ 1959（昭和34）年」[図面、写真、解説]

写真：「当時のキャンパスを北西より望む」、「建設途中のプラズマ研究所の一部」、「完成当時の豊田講堂（昭和35年頃）とキャンパスの様子」（写真提供：中日新聞社）

解説：東山キャンパスは、戦後急速に発展していきます。1950年代になると、東山キャンパスの敷地が拡大され、学部が相次いで移設・設立され、現在のキャンパスの姿に近くなってきました。

（4）「今に生きる「緑の学園」構想 現在のキャンパス」[図面、写真、解説]

写真：「学内でもっとも古い建物／工学部1号館」、「緑のトンネル」

解説：現在の東山キャンパスは、グリーンベルトを中心に緑が多く、工学部5号館の北側の並木（緑のトンネル）も創設時に植樹したものが、時を経て現在のように緑深くなりました。新しい建物も数多く建設されてきましたが、現在学内でもっとも古い建物の工学部1号館南側建物などは、創設当時のなごりを留めています。

（5）「昭和17年名古屋帝国大学案」[設計図（略）、解説]

1942（昭和17）年に作成された『名古屋大学計画案』。1939（昭和14）年創設直後から、渋澤総長が

委託した内田祥三東京帝国大学教授を中心に計画の検討が始まりましたが、その後戦時下の事情や植樹調査報告をした本多静六同教授の意見などにより、徐々に計画は修正されていきました。当初は正門が鏡ヶ池の南（図の左端ロータリー付近、現教育学部附属中高等学校周辺）に設置される予定でした。（6）パソコンによるスライドショー（名古屋大学キャンパスの移り変わり）

「戦時下の名帝大 How the University survived World War II」コーナー（図5）

（1）「病院の空襲焼跡」[写真]

名帝大は、1945(昭和20)年の3月と5月の空襲によって、全建物の約58%を焼失しました。なかでも鶴舞キャンパスの医学部は、その大半が木造建物であったので、3月12、19日の空襲によって約97%を焼失しました。写真は、3月の空襲直後に撮影されたものです。中央の建物は、鉄筋コンクリート造りの附属図書館・講堂で、幸いにも被災を免れました。

（2）『病院防空』[複写資料]

1945(昭和20)年3月の空襲被害後、その時の状況(戦跡)を教訓(戦訓)として『病院防空—戦跡と戦訓—』が作成されました。医学部附属病院は、空襲の下で名古屋市民のもっとも重要な治療機関であったため、疎開することができませんでした。[冊子複製もハンズオン展示]

（3）「戦時下でも続けられた基礎研究」[複写資料]

・1944(昭和19)年9月に行われた理学部化学科の「後期業績報告会」のプログラム(複製)。物理学科の学生も参加しています。軍事研究はわずかであることがわかります。(山崎一雄名誉教授提供)

・「化学談話会」の記録(複製)。理学部化学科では研究発表や論文紹介のためにほぼ週一回、「化学談話会」がおこなわれていました。戦争中は1945年6月が最後となりましたが、終戦直後の12月6日には、早くも第55回として再開されています。(山崎一雄名誉教授提供)

（4）「研究施設の疎開」[地図、解説]

理・工学部を中心とした研究施設の疎開は、1945(昭和20)年2月には計画ができていましたが、実施は3月の医学部空襲の直後で、短期間にほぼ完了しました。重い機械類や書籍はキャンパスの地下に埋められました。疎開場所は80以上にのぼり、この地図の赤丸が示すように、北は新潟県、南は奈良県まで広範囲に及んでいます。疎開のおかげで5月の東山キャンパス空襲による被害はごくわずかですみ、戦後の研究再開に役立ちました。終戦の年の11月中旬には、はやくも理学部の授業が再開されました。なお、空襲による本学構成員の人的被害は少ないと伝えられていますが、正確なことは分かっていません。[疎開先一覧のパネルをハンズオン展示]

（5）「総長懇談会」[写真]

総長と学生との懇談会(総長懇談会)は、1942(昭和17)年2月、名帝大最初の学生寮(菁々寮)で豚鍋をつつく座談会として始められました。写真のように本部会議室で開催されるようになったのは、翌年のことです。ここで渋澤は、所信を書いた小冊子『我等の学園』を学生に配付しました。

（6）「軍事教練」[写真]

1942年2月に行われた報国隊の武装行進で、東区西二葉町の理工学部校庭から護国神社まで行進し

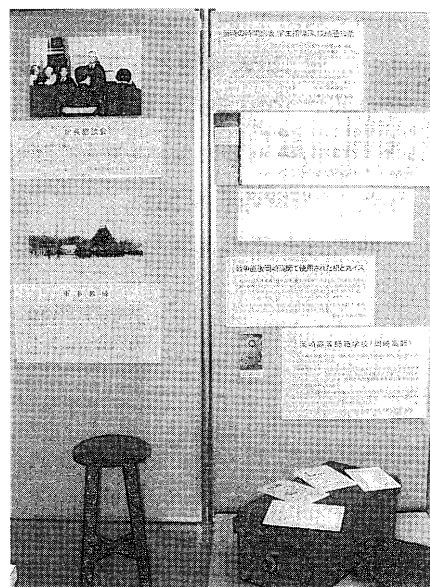


図5 「戦時下の名帝大」のコーナー

た途中の一コマです。報国隊とは、戦時下における各種動員や戦意高揚などのために編成された各学校単位の全校組織で、戦況の悪化につれて学校防護の任務も担うようになりました。文部省は、名帝大官制公布前日にあたる1939（昭和14）年3月30日、大学での軍事教練を必修化しました。当時の時間割表〔下記（7）〕もご覧ください。名帝大では、小幡ヶ原（現名古屋市守山区）や高師ヶ原（現豊橋市）などで軍事教練が行われました。

（7）「当時の時間割表、学生指導簿、成績通知票」〔複写資料〕

- ・1943年10月からはじまる理学部生物学科の前期授業時間割表（複製）。時限が実際の時刻で表現されていたこと（たとえば午前8－9など）、授業は1時間、1時間半、2時間の3通りあったことがわかります。水曜日の午後の2時間は教練にあてられています。
- ・1942年10月入学工学部応用化学科一年生の「工業分析化学」指導簿（複製）。石丸三郎教授による実験指導の詳細な記録です。80項目の豊富な実験内容とともに、入学者が北海道から九州まで全国に及んでいたことがわかります。（柘植 新教授提供）
- ・1941年に理工学部機械学科に入学した、ある学生の成績通知票（複製）。〔実物もケース展示〕

（8）「戦争直後岡崎高師で使用された机と丸イス」〔実物〕

机がわりの弾薬箱：戦争直後、振風寮で使われました。「岡崎高等師範学校／番号5」というラベルが貼られています。もとは豊川海軍工廠で生産した機銃弾を運ぶためのものが、戦後転用されました。机上に展示してあるのは、当時の文芸誌や寮誌（表紙複製）です。〔複製したものは、『生誕二百年記念ゲーテ祭』、『胡桃1』、『Logos 創刊号』、『振風寮誌 1950年度』〕（加藤貞夫氏寄贈）

丸イス：岡崎高師（焼印）の化学実験室で使用されたもの。その後、東山キャンパスの旧教養部でも使用されました。（加藤貞夫氏寄贈）

（9）「岡崎高等師範学校（岡崎高師）」〔解説〕

岡崎高等師範学校は、理科系中等教員養成のために1945（昭和20）年4月に設置されました。岡崎市から寄付された旧岡崎市立工業学校の校地・校舎を使用する予定でしたが、入学式直前の7月20日深夜の大空襲でそのほとんどが焼失しました。その後、豊川市の旧豊川海軍工廠工員養成所と同寄宿舍に移転しました。同校は、1949年5月、新制名古屋大学に包括されて名古屋大学岡崎高等師範学校となった後、1952年3月末に閉校し、学籍関係や附属中学・高校は名大教育学部に引き継がれました。この間わずか7年間でしたが、600名余の卒業生を送り出しました。

（10）渋澤元治の書「進吾往也（進むは吾が往く也）」〔軸装、実物〕

当時の新聞記事から、学生寮に飾られていた渋澤の書であることがわかります。「進吾往也」は『論語』巻5にある言葉ですが、渋澤はそれに、学問は倦まずたゆまず自ら最後まで努めよという呼びかけを込めました。戦時下の名古屋市では軍需工場の従業員が急増して下宿代が急速に上がったため、名帝大では、市内のいくつかの民家を借りて小規模な学生寮としたようです。（市川茂雄氏寄贈）

（11）ハンズオン・コーナー

「当時の学生アルバム：昭和17年名帝大理工学部機械学科卒業アルバムより複製」、『病院防空』（全部）の複製、「重要研究施設等疎開一覧（『名古屋大学50年史・通史編』より）」

「渋澤元治の生涯 The life of Motoji Shibusawa」コーナー（図6）

（1）「幼年期から壮年期の渋澤元治」〔解説〕

明治財界の大御所といわれる渋澤栄一の甥にあたり、栄一にかわり渋澤本家を継ぎました。4才から小学校に通うなど、小さいときから利発でしたが、いたずら好きで周りをハラハラさせていたようです。

有力な農家であった洪澤家の跡取りとして、農学の道を榮一にすすめられましたが、「この道のほかに進む道なし」と電気工学の道を選びました。大学卒業後は逓信省電気試験所に勤め、水力発電や鉄道の電化などの指導にもあたりました。後に東京帝国大学で教鞭をとり、やがては電気学会会長など、諸学界に貢献しました。頑固でしたが意志を誠実につらぬく努力家でしたので、まわりによく慕われました。

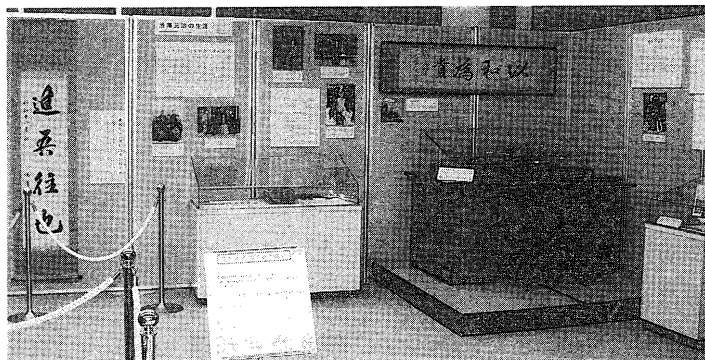


図6 「洪澤元治の生涯」のコーナー

(2) 洪澤元治の写真

「1893（明治26）年頃、書生として東京で過ごした時代（元治は前列左端）」：中学では、成績は優秀でしたがイタズラ好きで操行点が悪く、一高の推薦から外れました。そこで試験で入ろうと、一高の受験勉強に励んでいた時期です。

「1898（明治31）年、寮の先輩らとともに（元治は前列右端）」：前年に東京帝大電気工学科に入学した元治は、この寮で個性的な先輩らと共同生活を楽しみました。

「1906（明治39）年1月、穂積陳重の長女孝子と結婚」：結婚時はまだ就職を決めておらず、周囲から心配されたりもしました。しかし、この年の5月、逓信省の通信局電気試験所へ技師として入所しました。

「1937（昭和12）年頃、東京帝大工学部での授業風景」：元治の教育理念は、実習・実験を大切にする事で学生の創意・工夫をうながし、学生自身の努力で学問を技術として体得させる、というものでした。

「1943（昭和18）年、名帝大総長在任中に勲一等に叙せられ、瑞宝章を授けられました。」：戦争が緊迫化して資材が手に入りにくくなるなか、大学の設備や規模を少しでも大きくしようと努力する日々が続いていました。

(3) 洪澤元治年譜 [略]

(4) 洪澤元治の書「以和為貴」（扁額装、実物）と写真

「和を以て貴しと為す」という聖徳太子の言葉は元治の座右の銘の一つです。書を求められると好んで書いた言葉でした。（名古屋大学工学部所蔵）

写真解説：書の前で談笑する洪澤元治

(5) 「洪澤元治愛用の机・イスなど」（実物）

洪澤元治が博士論文を書いた時代から愛用していた机とイス。同じく愛用していた文箱と時計とともに、2001（平成13）年、洪澤元治記念館より名古屋大学に寄贈されました。

(6) 「晩年（引退後）」[解説、写真]

総長を辞めた後は、ふるさと埼玉県深谷市の生家で余生をすごしました。文化功労賞を受賞したのを

契機に、電気保安事業に功績があった人を表彰する洪澤賞をもうけました。また、自伝『五十年の回顧』や『電界随想』をはじめ多数の著書や随筆を残しました。専門の電力関係だけでなく、本居宣長・松尾芭蕉・渡辺崋山・徳川義直など、東海地方出身の歴史的人物にも関心をもっていました。白寿（数え年99歳）の祝いをする長生きでした。

写真解説：自宅の庭で親戚の子どもと一緒にの洪澤元治。80才（1956年）の時です。

(7) 「1972年（昭和47年）に書いた手紙の下書き」〔複製、解説（略）〕

榊さんに読んでもらいたい自分の原稿を送ったときにつけた手紙です。

(8) 「洪澤元治『電界百話』（1934年刊）への鉛筆による本人の書きこみ（複製）」

(9) 洪澤元治の著書〔実物をケース展示〕

『電界百話』（1934（昭和9）年、オーム社刊）：洪澤自身による書きこみが見られる目次ページを示します。この本は、日本の電気事業草創期の貴重な記録です。（宮地巖名誉教授寄贈）

『弟洪澤治太郎君をかたる』（1952（昭和27）年、故洪澤治太郎君伝記刊行会刊）：2つ違いの実弟治太郎氏の伝記です。治太郎氏は、元治の郷里埼玉県八基村（現、深谷市）の村長などを歴任後、1942年64才で逝去。

『五十年間の回顧』（1953（昭和28）年、洪澤先生著書出版事業会刊）：総長懇談会で学生に配布した「われらの学園」にふれた部分を示します。この本は「50年間の電気界」と「名古屋大学創設私記」の2部構成で、後者は『名古屋大学五十年史』で頻繁に引用されています。喜寿（数え77才）記念。この本のコピーは、参考書コーナーでご覧になれます。

『電界随想』（1963（昭和38）年、コロナ社刊）：副題にあるとおり「本邦電気事業の生い立ち」を述べたものです。米寿（数え88才）記念。この本のコピーは、参考書コーナーでご覧になれます。

『思い出の随想』（1974（昭和49）年、洪澤先生白寿記念会刊）：パネルに示した榊米一郎氏宛ての手紙で述べられている、白寿（数え99才）記念の著書。

(10) 名帝大関係資料〔実物をケース展示〕

「名帝大の開学記念に配られた絵葉書」：1組5枚のうち、色刷りの2枚は完成予想図です。

（岸本淳子氏寄贈）

「名帝大時代に行われた訓辞などの原稿つづり」：1939～49（昭和14～24）年に行われた、おもに総長による訓辞や祝辞の原稿つづり。70近い原稿が収められています。

「洪澤元治が退任に際して書いた原稿（一部）」：洪澤元治が健康上の理由から名古屋大学総長を辞任した際、書かれた訓辞「退任に際して学生諸君に告ぐ」の原稿。実際には体調が悪く、学生を前にして話すことは出来なかったため、印刷して配られました。独創性を持ちつつも調和していくことの大切さを強調しています。

「洪澤元治愛用のメガネ」〔2点〕

「1941年に理工学部機械学科に入学した学生の成績通知票」

「整流器ベルトーロ ある数学者の夢

“Vertoro”, a rectifier invented by a mathematician」コーナー（図7）

(1) 「ベルトーロ（整流器）」〔実物〕

交流電流を直流になおす機械です。展示品は、工学部の学生実験などに使用されて来ました。ベルトーロは、名大の前身校のひとつ第八高等学校の数学科教授椎尾 調（しいおひとし）氏が、東京帝大在学中の1918（大正7）年に特許出願し（2年後に許可）、地元メーカーによって1936（昭和11）年

から本格的に製品化されました。1968年まで、海外向けを含め計7545台が出荷され、金属メッキ、電池充電、放送局の真空管や映写ランプの電源などに広く利用されました。

(2) 「ベルトローを囲む学生たち」[写真]

1943年まで西二葉町にあった電気学科実験室で撮影。

(3) 「ベルトローの名のおこり」[解説]

ベルトロー (Vertoro) は、変換・転換器を意味する英語 (インバーターなど) の語尾「バーター」をエスペラント読みして、発明者の椎尾 詞氏が名付けました。彼は、世界共通語として提唱された人工語のひとつである、エスペラント語の賛同者でした。

(4) 「椎尾 詞 (1895～1936)」[肖像写真、解説]

愛知県生まれの数学者。円福寺第26代住職。第八高等学校在学中に、交流モーターで直流発電機を回して市電用の直流を作っているのを見て、もっと効率のよい整流器の開発をこころざしたのが「ベルトロー」の発端です。大学卒業後、母校八高に赴任して以来、十数年にわたり私財をつぎこんでその実用化をはかりました。メーカーに特許実施権を提供し、製品化が軌道に乗った矢先に肺結核で死去。41才でした。「正しいと思い、良いと思ったことは、その時、その場で行え」をモットーに、二進法やローマ字の普及、学校給食や奨学金の実現などに尽力しました。「八高数学」の伝統を築いた教育者としても評価されています。

(5) 「身近にある整流器」[実物]

家庭内では、ポータブルタイプの電気製品などで交流を直流に変換するため整流器を使います。(原理的にはベルトローと異なります。)現在ではACアダプターとしてたくさん使われています。下はノートパソコンに使われている整流器です。

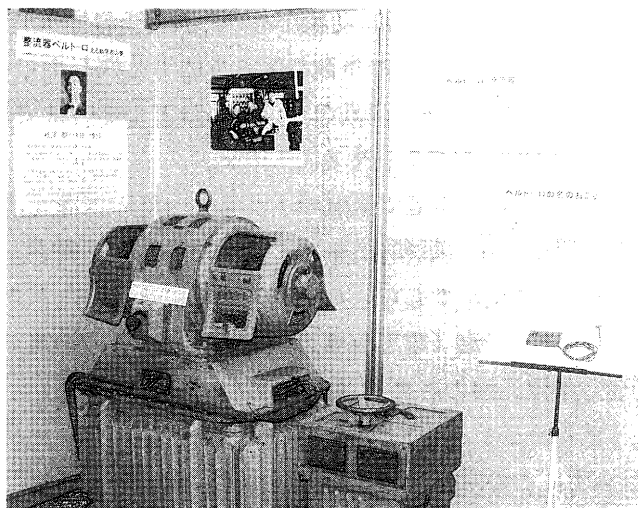


図7 「整流器ベルトロー」のコーナー

参考書コーナー (ハンズオン)

渋澤元治著『五十年間の回顧』(コピー)、渋澤元治著『電界随想』(コピー)、『名古屋大学理学部二十五年小史』(コピー)、『名古屋大学工学部25年の歩み』(コピー)、『名古屋大学五十年史通史一』、『写真集名古屋大学の歴史 1871～1991』、『岡崎高等師範学校五十年誌』

英文チラシ

会期中に会場で配布した英文チラシを図8に示した。

会期中に行われた博物館特別講演会

第14回 2002年4月19日(金)

「名古屋帝国大学誕生のころ」(加藤鉦治氏、名古屋大学大学史資料室長、教授)

第15回 2002年5月10日(金)

「名古屋帝国大学創設期のキャンパスプラン」(木方十根氏、名古屋大学施設計画推進室、助手)

The 4th NUM Special Exhibition with the Nagoya University Archives
(From April 8 to August 31, 2002)

Motoji Shibusawa and his role in the birth of Nagoya Imperial University

The 4th Special Exhibition focuses on the birth of Nagoya Imperial University (now Nagoya University) and covers the period from 1939 to 1946, when Dr. Motoji Shibusawa (1876-1975) was the first president of the University.

Nagoya Imperial University was born in 1939, when Nagoya Medical College (founded in 1871) was re-organized into the School of Medicine and the School of Science and Engineering. The latter was divided into the School of Science and the School of Engineering in 1942. President Shibusawa dedicated himself to the establishment and development of the University despite the difficult times of the so-called Fifteen Years' War (1930-1945). The exhibition includes the following six features:

1. The Establishment of Nagoya Imperial University

Interesting newspaper articles of the time tell the story of the university's foundation.

2. Higashiyama Campus – from past to present

Maps and photos illustrate different phases of the campus over 60 years.

3. The first commercial electron microscope in Japan

The original Hitachi HU-2 is exhibited, which was manufactured and put to practical use for the first time in Japan. It was installed in 1942 at the School of Engineering and used over many years. Photographs taken through this microscope for scientific publications are also displayed.

4. How the University Survived World War II

The University experienced various hardships during the Second World War (1941-1945). Bombing damaged many of the buildings, laboratories and facilities were evacuated, researches continued under severe conditions, and students were lost to military training. Old photographs, hands-on copies as well as actual artifacts illustrate life during wartime.

5. The Life of Motoji Shibusawa

The personal history of the first president is displayed, together with some of his belongings, hand-written manuscripts, calligraphy and photographs.

6. "Vertoro," a rectifier invented by a mathematician

Mr. Hitoshi Shiio (1895-1936), a professor of mathematics at the 8th High School (antecedent of Nagoya University), invented and improved an AC/DC rectifier. The actual machine which students used for experiments is exhibited. His model was manufactured exclusively by a company in Nagoya from 1936 to 1968.

図8 会場で配布した英文チラシ

第16回 2002年6月7日(金) 名大祭期間中

「電子顕微鏡 HU-2 型をめぐる」(丸勢 進氏、名古屋大学名誉教授)

第17回 2002年6月21日(金)

「渋澤元治の足跡」(高橋雄造氏、東京農工大学、教授)

回想：榊米一郎氏(名古屋大学名誉教授)、宮地 巖氏(名古屋大学名誉教授)

会期中に行われた博物館コンサート (NUMCo)

第4回 2002年4月19日(金)

長坂佐代子さん(ソプラノ)、鈴木美香さん(チェンバロ)

演目：Caro Laccio いとしい絆よ、Opera “Rinaldo” より Lascia ch’io pianga 私を泣かせてください、Les Tourbillons つむじ風、Les Soupirs ため息、Opera “Serse” より Ombra mai fu (largo) 樹木の陰で(ラルゴ)、Caro mio ben いとしい女(ひと)よ

第5回 2002年6月29日(土)

熊谷祥子さん(ヴァイオリン)、Weitzer 朝恵さん(チェロ)

演目：Pepuschのソナタ、ルネッサンス期のいろいろな舞曲を集めて、Dall’Abacoのサラバンドとアリア、Rameauの歌劇“イポリトとアリシー”より組曲、Veraciniのソナタ

(報告者：西川輝昭)